

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530492

研究課題名（和文） 意味システム論からみた都市の自己産出性の研究

研究課題名（英文） Autopoietic system theory and generation of the city as meaning-system

研究代表者

佐藤 俊樹 (Sato Toshiki)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10221285

研究成果の概要（和文）：

- 1) 意味システム論としてのコミュニケーションシステム論を、特に従来の社会学での制度概念とのつながりと複数の分野への応用しやすさに注目して、理論的に再構築した。
- 2) 1)の成果を都市の生成に適用することで、都市の自己生成の形態を、自己産出的な意味システム論の視点から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

- 1) theoretical reconstruction of the communication-system as meaning-system
- 2) redescription of self-generating patterns of the cities from the viewpoint of autopoietic meaning-system

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	2,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：制度・構造・社会変動

## 1. 研究開始当初の背景

社会記述の方法論はさまざまな模索を重ねてきたが、最近の大きな理論的革新として、ドイツの社会学者、ニクラス・ルーマン Niklas Luhmann による自己産出的なコミュニケーションシステム論の提唱がある。

彼の著作が英語や日本語で翻訳されつづけているように、これは最新の社会学理論として、社会科学の個々の専門分野を超えたグローバルな影響力をもちはじめている。けれども、意味システム論の発想からの再編成が

あまりに革新的かつ急速だったために、さまざまな課題を未解決のまま残した。なかでも特に大きな欠落といえるのは、具体的な事象におけるシステムの同定基準である。

ルーマン自身による理論構築はこの点で大きく一貫性を欠いていた。そのため、最も重要な「何がシステムにあたるのか」が恣意的になってしまった。それゆえ、システム論の概念を経験的にどの程度あてはめられるかも、不明確なままになっている。

ルーマンのシステム論は理論的な試みとしては多くの注目を集めながら、経験的な分

析を進める研究者からはしばしば「よくわからない抽象論」と見なされ、理論モデルとして十分に普及・発展してこなかった。その主な理由もここにある。

研究代表者は早くからこの問題の重要性を指摘し、コミュニケーションシステム論を新たに定式化する作業を進めてきた。このうち、理論社会学的な部分については、すでにある程度の成果をあげたと考えているが、経験的な記述や分析に本格的に応用していくためには、理論的な再構築とともに、個々の事象からの帰納的アプローチが欠かせない。わかりやすくいえば、どんな対象にどの程度あてはめられるのか、あてはめることによってどんなことが新たな知見として加わるのか。それらの見通しを理解しやすい形で示した上で、実際に具体的な対象を題材に使って、実践的にやってみせる必要がある。

そのための実験的な試みとして、本研究では都市をとりあげて、組織、法、マスメディア、科学などの他のシステムの経験的な記述と比較しながら、その自己生成のあり方を分析することにした。そして、上記の一連の作業を通じて、コミュニケーションシステム論と都市の社会学的記述の双方の可能性と限界を見定めることをめざした。

## 2. 研究の目的

主な研究目的は二つである。

第一は、さまざまな自己産出的な社会的事象を、特に意味の境界作用に注目して適切に記述できるコミュニケーションシステムの理論モデルを構築することである。

第二は、それを具体的な都市生成に適用して、意味システム論的アプローチの記述性能を検証することである。

## 3. 研究の方法

第一の目的に関しては、ルーマン自身のをふくめて、自己産出論とコミュニケーションシステム論の既存研究を参照しながら、それらの可能性と問題点を整理し、見通しのよい理論モデルを新たに構築する。

そのためには、システム論の抽象的な概念を明確に定式化するだけでなく、「複雑性の縮減 reduction of complexity」や「作動的な閉じ operative closure」などの、魅力的だがあつかいづらい命題群がどの程度一般的に使えるか、裏返せば、どこで使えなくなるかを、体系的に提示することが必要になる。

また、従来の社会学で展開されてきたシステムや制度の概念とどの程度重なり、どこで決定的にちがってくるかを、一覧性のある形

で示すことも欠かせない。

第二の目的に関しては、日本と欧米の代表的な都市の発展を調べた既存研究を参照しつつ、現地でのフィールドワークも行って、その生成のパターンをとらえる方法論を確立し、経験的な再記述を進める。

ルーマン自身のシステム論は、彼がもともと専門としていた組織と法を主な参照枠として構築された。特に、自己産出的なシステム概念では、組織が事実上の標準になっている。そのため、組織を離れれば離れるほど、システム概念の適用可能性や限界がぼやける。その典型といえるのが「全体社会システム societal system (Gesellschaftssystem)」である。

都市は、「全体社会システム」とはまたちがった意味で、重要な境界事例になる。全体社会とはちがい、都市は経験的に境界をもつ。その一方で、地形や工学的インフラストラクチャーなどの、物理的な制約条件によって強く規定されている。それゆえ、意味システム論の適用限界を見定める上で、格好の実験材料になる。

ただし、そのためには、意味、より正確に言えば、意味的な境界作用に直接出てこない物理的な条件をも、適切に視野に入れておく必要になる。それには都市社会学はもちろん、都市史や地理学、さらには都市計画、建築、交通工学などの既存研究の成果をある程度理解し、使いこなせることが欠かせない。

## 4. 研究成果

(1) 第一の目的に関しては、ルーマンが提唱した自己産出的なコミュニケーションシステム論を再構築して、特にシステム同定基準を一貫的にあたえられる理論モデルをつくった。もちろん、これも今後さまざまな形で改良されていくべきものだが、従来にない論理的な明確性をもたせることで、将来の改良可能性も見通しやすくした。

(1.1) その成果は主に『社会学の方法』(5. 参照、以下で書誌情報を省略した著作・論文は5. に記載されている)の後半部で公表されている。これは直接には佐藤俊樹『意味とシステム』(勁草書房、2008年)での成果をさらに発展させたものだが、特に内部観察 internal observation と自己論理 autology (Autologie)を基本的な視点として全体の制約条件にした上で、「複雑性の縮減」や作動的な閉じなどの、ルーマンがシステム論に導入した、魅力的だが適用限界が不明確な命題群を再定義しつつ、意味の事後成立性を鍵概念にして、時間を必然的にふくむシステムとして、コミュニケーションシステムを新たに

定式化した。

特に現代社会論でも重要な論点となってきた「機能的分化 functional differentiation」をめぐっては、組織システムと機能システムの複合のあり方について、従来にない視点から新たな定式化ができることを示した。また、そこでも時間が重要な位置を占めることを明らかにした。

(1.2) これらの成果の応用・発展として、「サブカルチャー／社会学の非対称性と批評のゆくえ」ではサブカルチャーを、『社会は情報化の夢を見る』の特にその終章では情報化社会と呼ばれる現象を、それぞれ主な題材に使って、社会科学の専門家以外にも普及しやすい形で再編成して公表した。

また、社会学の専門家向けのものとしては、書評論文の応答の形で、『意味とシステム』書評へのリプライにまとめて、理論的な再構築における論点がより明確に伝わりやすくなるようにした。

(1.3) また(1.1)の定式化を通じて、自己産出的なコミュニケーションシステム論と従来の社会学で展開されてきた制度論、特にマックス・ウェーバーやゲオルク・ジンメル、ロバート・マートンらによる経験的な分析との連続性と不連続性を明確にできた。

こちらの成果は主に『社会学の方法』前半部で公表されている。社会学的思考を歴史的に跡付ける作業では、これまで、タルコット・パーソンズ以降を展望できる包括的な視座が提案されてこなかったが、これはその欠落を埋める作業にもなっている。

(1.4) "Functionalism :Its Axiomatics"で、上記の成果の一部を英語でも公表した。

(2) 第二の目的に関しては、組織や他の機能システムなど、複数の分野に横断的に適用できる範例をつくとともに、日米欧の代表的な都市の生成パターンを形式言語の視点も使いながら比較対照することで、自己産出的な意味システム論の適用可能性と制約条件を明らかにした。

(2.1) 分野横断的な範例については『社会学の方法』第 10-11 章で述べたほか、「オートポイエティック・システム論から組織を見る」では、経営学・組織科学の既存パラダイムとの関連に焦点をあてて、自己産出的な意味システム論の可能性と限界とを明らかにした。

また、「階層帰属の意味論」では、再帰性の概念が階層帰属意識の解釈にも応用できることを示した。

(2.2) 都市の時間的な生成パターンへの適用については、独自に論文「中間考察：都市生成の意味論と形式言語」としてまとめた。このなかでは、二次元セル・オートマトンなど、数理科学系の自己産出論が応用できる条件がどんな形で成立するかを明らかにすることを通じて、理工学系の分野までふくめた自己産出的システム論の広がり、そのなかで社会学的な意味システム論が占める位置を明確にした。

さらに、その成果の一部を『社会学の方法』前半部での都市史的な考察に用いて、社会学と都市との関連性に新たな光をあてることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

佐藤俊樹、階層帰属の意味論 自省的近代における「階層意識」、社会学評論、査読有、59(1)、737-751、2010.

佐藤俊樹、オートポイエティック・システム論から組織を見る 「二次の観察」としての理論の射程、組織科学、査読有、43(1)、20-28、2011.

Sato,Toshiki, Functionalism :Its Axiomatics, Sociopedia.ISA, refereed, Sage

(<http://www.sagepub.net/isa/resources/pdf/Functionalism.pdf>. 有料コンテンツにつき閲覧制限あり), 2011.

佐藤俊樹、『意味とシステム』書評へのリプライ、相関社会科学、査読無、20、89-102、2011.

〔学会発表〕(計 1 件)

佐藤俊樹、機能主義の未完のプロジェクト、日本社会学会、2009 年 10 月 19 日、立教大学.

〔図書〕(計 11 件)

◎単著

佐藤俊樹、社会は情報化の夢を見る [新世紀版]ノイマンの夢・近代の欲望、河出文庫、全 347 頁、2010.

佐藤俊樹、社会学の方法 その歴史と構造、ミネルヴァ書房、全 434 頁、2011.

◎共著

広田照幸・佐藤俊樹、対論 せめぎあう「教

える」「学ぶ」「育てる」、広田照幸編、自由への問い5 教育、岩波書店、1-8、2009.

佐藤俊樹、サブカルチャー／社会学の非対称性と批評のゆくえ 「世界を開く魔法」社会学編（補論1 社会物理学の可能性、補論2 社会の自己産出と内部観察をふくむ）、東浩紀・北田暁大編、思想地図 5、NHK出版、205-233、2010.

佐藤俊樹、現代の〈労働・仕事・活動〉 ハンナ・アレントの余白から、佐藤俊樹編、自由への問い6 労働、岩波書店、29-53、2010.

佐藤俊樹・広田照幸、対論 働くことの自由と制度、佐藤俊樹編、自由への問い6 労働、岩波書店、1-28、2010.

Sato, Toshiki, An Explosion of Inequality Consciousness: Changes in Postwar Society and 'Equalization' Strategy, Sawako, Shirahase (ed.) Demographic Change and Inequality in Japan, Trans Pacific Press, 16-45, 2011.

佐藤俊樹、「奪われなさ」と平等原理、宮寺晃夫編、再検討 教育機会の平等、岩波書店、17-34、2011.

佐藤俊樹、転態する階層帰属、斎藤友里子・三隅一人編、現代の階層社会3 流動化のなかの社会意識、東京大学出版会、3-16、2011.

佐藤俊樹、冷たく熱いマクルーハン メディア論をメディア論してみよう、道の手帖 特集マクルーハン、河出書房新社、84-89、2011.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

都市の生成パターンへの適用に関しては、上記の図書および論文のほか、「中間考察：都市生成の意味論と形式言語 もう一つの自己

産出から」を書いた。読みたい方は研究代表者まで連絡されたい。

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 俊樹 (Sato Toshiki)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：10221285

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：